

第 21 回フィロロギカ研究集会

2023 年 1 月 29 (日) 13 : 30 より

オンライン開催 (Zoom 使用)

発表要旨

アウトリュコス『運動する球について』の命題 2 と命題 3 の関係について

本田元

アウトリュコス (前 4 世紀)『運動する球について』は、現在まで伝わる最古の数学書とされる著作であり、軸の周りを回転する球の表面上の点の軌跡や円の性質に関する 1 2 個の命題を扱う。この著作は天文学と関わりが深く、特に後 4 世紀のアレクサンドリアの天文学教育では、基礎的な数学書であるエウクレイデス『原論』から高度な天文学書であるプトレマイオス『数学集成』への橋渡しをする教科書として用いられたと見られる。

さて、今回の報告では、現在に伝わる『運動する球について』のテキストの成り立ちについて考えたい。その際に注目するのは、命題 2 と命題 3 である。命題 2 は、球が軸の周りを一定時間回る時、球面上の複数の点が互いに相似な円弧を描くことを主張する一方、命題 3 は、同様の場合に、点が描く円弧は相似であることを主張する。つまり、命題 2 は点、命題 3 は円弧に関する性質を主張する。

『運動する球について』のフランス語訳を行った Aujac は、命題 2 と同じ性質を別の方法で証明するものとして、命題 3 がアウトリュコス以降の時代に加えられたものではないかと疑っている。

確かに、『運動する球について』で用いられる表現を改めて調べてみると、命題 3 は、①背理法によって証明を行う際に用いられる形式的表現、②点が円弧上を運動することを表す表現、の 2 点において、他の命題とは異なっている。したがって、用いられている表現の違いから見ると、命題 3 が他の命題とは異なる表現を用いる人物によって加えられた可能性が強まる。

一方で、Aujac が言うほど、命題 2 と命題 3 の主張は同じではないように思われる。というのも、先に見たように、命題 2・3 は、その要点がそれぞれ点と円弧の性質である点で異なっているからである。後 4 世紀のパッポスも、彼の著作『数学集成』の中で、命題 2 が点、命題 3 が円弧に関する性質であると認識している。

そこで、そのような命題2・3の性質の違いが、天文学の著作の中でどのような意味を持つのか、調べてみる。すると、命題2は、天球の日周運動を考慮する、前4世紀以降の多くの天文学の著作の中で用いられる一方、命題3は、天球の日周運動に加えて太陽の年周運動を考慮する、テオドシウス（前2世紀）『昼と夜について』のみに用いられる箇所が見出せる。

以上のことから、本来『運動する球について』には命題2のみがあったが、前2世紀頃に『昼と夜について』のような天文学の著作が整備される中で、命題3が後から加えられたと推測される。

一般的に、後4世紀以降の天文学教育の中で教科書として用いられた数学や天文学の著作には、度重なる改訂が加えられたことが指摘されている。一方で、今回報告する『運動する球について』の例は、それ以前から新たな文献の登場とともに、テキストに改訂が加えられた可能性を示す。

Aujac, G. (1979), *Autolycos de Pitane. La Sphère en mouvement. Levers et couchers héliaques, testimonia*, Paris.

ソポクレーズ『アンティゴネー』252行目 $\tau\iota\varsigma$ の読みについて

國上富

この発表は、標題箇所において諸校訂本が $\tau\iota\varsigma$ （不定代名詞）と印刷しているところを、写本伝承どおりに $\tau\iota\varsigma$ （疑問代名詞）で読み直す提案である。

問題部分は、 $\acute{\alpha}\lambda\lambda' \acute{\alpha}\sigma\eta\mu\omicron\varsigma \omicron\upsilon\rho\gamma\acute{\alpha}\tau\eta\varsigma \tau\iota\varsigma \eta\nu$.（呉訳「そいつをやった者は誰か知らんが、何のしるしも残さないんで」）である。ポリュネイケースの埋葬を禁じたクレオーンは見張りを立てるが、いつの間にか埋葬が行われてしまう。報告に来た番人が現場の状況を描写し、手がかりがなく犯人は分からないと言う場面である。Aldus (editio princeps, 1502) 以来、校訂本が印刷しているのは $\tau\iota\varsigma$ である。これに対して、L 写本や A 写本といった主な中世写本は $\tau\iota\varsigma$ を伝えている。

この事実は、apparatus criticus（以下、app. crit.）にも註釈等にもほとんど記載がない。app. crit.での報告は2例見つかっているが、註釈等において $\tau\iota\varsigma$ の却下を説明した例は見つけられていない。写本の中にはこの語を書写していないものがあり、それを $\tau\iota\varsigma$ om.と報告する app. crit.はあるが、その場合でも他の写本に $\tau\iota\varsigma$ とあることの報告はない。このように、 $\tau\iota\varsigma$ は忘れ去られた読みになっている。

校訂本に従って $\tau\iota\varsigma$ と読んだ場合、2つの解釈があるが、文法的にどちらをとるべきか議論が分かれている。

写本伝承のとおり $\acute{\alpha}\lambda\lambda' \acute{\alpha}\sigma\eta\mu\omicron\varsigma \omicron\upsilon\rho\gamma\acute{\alpha}\tau\eta\varsigma \tau\iota\varsigma \eta\nu$.と読んだ場合、 $\tau\iota\varsigma \eta\nu$ 「誰であったか」は、間接疑問としてうまく収まりそうである。 $\acute{\alpha}\sigma\eta\mu\omicron\varsigma$ の主語としては、 $\omicron\upsilon\rho\gamma\acute{\alpha}\tau\eta\varsigma$ か $\gamma\eta$

(250 行目) が考えられ、いずれも自然な解釈が可能である。 $\gamma\eta$ のほうが、直前に番人が述べる地面の描写 (249–52 行目) の流れを受けた形となって、全体がより自然な解釈になりそうである。

以上から、校訂本の $\tau\iota\varsigma$ では文法的に議論が分かれてしまうのに対して、写本が伝える $\tau\iota\varsigma$ は構文的に明快で意味の揺れも小さく、安定した読みとして優位であると考えられる。

(では、なぜ $\tau\iota\varsigma$ が定着したのか。これについては、断定はできないものの、多少の推測はできそうであり、発表の中で併せて説明したい。)

Leon Battista Alberti, *De re aedificatoria* lib.7 cap.7

大塚英樹

古典建築の柱 *columna* の柱礎 *basis* は、三種類、ないしは四種類のパーツから出来上がっている。三種類のパーツから成るのが、Alberti が言うところのドーリス式で、これは正方形の厚板 *latastrum* の上に、二つのドーナツ状円盤 *thorus* とその間に挟まれた溝つき円盤 *orbiculus* からなる構造が載った格好をしている。それに対し四種類のパーツから成るのがイオニア式である。これはドーリス式の *orbiculus* 部分を上下に引き伸ばし、その中央に二本の細輪 *anulus* を入れた格好の柱礎である。だが、ドーリス式にしても、イオニア式にしても、柱礎の高さは同一で、柱最下部の半径に等しい。したがって、イオニア式のほうが、ドーリス式より *latastrum* や *thorus* の厚みが当然薄いということになる。

では各パーツの具体的寸法はどのように決められていたであろうか。Alberti によれば、ドーリス式では、まず柱礎の高さを三等分し、その最下部を *latastrum* の厚みとする。それから *latastrum* を除いた部分を四等分し、その最上部を上方 *thorus* の厚みに当てる。そして残った部分を二等分し、その二つを *orbiculus* と下方 *thorus* に分配する。これがドーリス式採寸方法である。

次いで Alberti はイオニア式採寸法へ話を進める。この場合二つの方法があった。最初の方法は、ドーリス式と同種のやり方で、まず柱礎の高さを四等分し、その最下部を *latastrum* の厚みとする。次いで *latastrum* 以外の部分を七等分し、その最下部の二つを下方 *thorus* に当てる。そして残った部分を三等分し、その最上部を上方 *thorus* に与え、残りの部分を二つの *anulus* とその上下の *orbiculus* に分配する。これが第一の方法である。

第二の方法でも *latastrum* の厚みは柱礎の高さの四分の一である。だがこれから先手法が異なる。まず *latastrum* を除いた部分を 16 等分し (この 16 分の 1 を Alberti は 1 *modulus* と呼ぶ)、その下部の 4 部分 (4 *moduli*) を下方 *thorus* に当て、上部の 3 部分

(3 moduli) を上方 *thorus* に当てる。残りは 9 moduli であるが、その真ん中の 2 moduli を中央の二つの *anulus* に与え、その上下の *orbiculus* にそれぞれ 3,5 moduli を配する。これが二つ目の採寸方法である。

ではなぜイオニア式柱礎には二つの採寸方法があったのか。Alberti は、二つ目の方法は「別の人々が考え出した」(*Alii excogitarunt*) ものだと述べている。つまりこの方法は、自然発生的に生じたものではなく、はじめから改良を意図して考案されたものである。それではその改良の目的とは何か。それが柱礎をより美しくするためであったことは疑いない。わざわざ苦勞して外見上劣る柱礎を創り出すはずはないからである。だがその審美的目的以外にもまだ別の目的があったように思われる。本論ではこの目立たぬ目的について論じたいと思う。

『オデュッセイア』第2巻 132–134 行について

小林薫

Od. 2. 132–4 は、ペネロペイア (P) を再婚に向けていったん実家に帰すよう要求する求婚者アンティノオスに対するテレマコス (T) の返答の一部である。「私が自ら進んで母を (実家に) 送り返せば、その父イカリオス (I) に酷く償いをせねばならぬ事になろう。なぜならその父から酷い仕打ちを蒙ることになるだろうから」と理解されることが多い。

しかしながら、I への「償い」(*ἀποτίμειν* 132) や彼から「酷い仕打ちを蒙る」(*κακὰ πείσομαι* 134) といった表現が何を指すのか分かりにくい上に、*γάρ* (134) が導入する「I への償いが必要となる理由」が「I から酷い仕打ちを蒙るだろうから」だというのは反復語法の気味がある。さらに、134–5 行「ダイモンからも他の仕打ちを受けることになる (P がエリニュスに呼ばわって呪いを発するだろうために)」の *ἄλλα* (134) は直前の *κακὰ* を受けており、これも *γάρ* で導入される理由の一部であるはずだが、ダイモンやエリニュスが I に直接関係するとは言えず、I への償いが生じる理由の説明として適当ではないといった問題もある。従来理解の前提には、

1. *τοῦ πατρός* (134) は I を指す。

2. *αἶ* (132) の直前にコンマがあり、条件文の帰結節は *Ἰκαρίῳ* までを含む。

の 2 点があるが、いずれも必ずしも自明であるとは言いがたい。1. については、これまでに古代より繰り返し疑問視されてきており、近代以降もむしろテレマコスの父、すなわちオデュッセウス (O) を指すと指摘する向きも少なくない。

本報告はこれを踏まえ、2. についても古代より既に指摘があり、中世写本にもその跡が窺える通り、132 行末、*ἀποτίμειν* の直後にコンマを置き、*Ἰκαρίῳ* は帰結節ではなく条件節に含めて理解するべきであると論じるものである。

これにより 132-4 行は「私が自ら進んで母を I に送り返せば、私は酷くたくさんの仕打ちを蒙ることになるだろう」となる。 $\gamma\acute{\alpha}\rho$ (134) はこの「仕打ち」が $\pi\omicron\lambda\lambda\acute{\alpha}$ であることの説明を導入し、内訳として「父 O からの仕打ち」、「母 P がエリニユスに呼ばわって発した呪いにより、ダイモンから受ける更なる仕打ち」、「人間たちから受ける非難」 ($\nu\acute{\epsilon}\mu\epsilon\omicron\iota\varsigma$ 136) の 3 つが列挙される。I への「償い」は言及されず、これをめぐる不可解さも解消する。

アリストテレス『形而上学』MN 巻における本文伝承の問題

西岡千尋

すでに本学会誌でも試みられているように (納富 (2019))、今後の『形而上学』の高等批評は、Primavesi が A 巻の新校訂で示した方法論 (2012) を軸に進められてゆくと思われる。それは写本伝承を α 系と β 系の二つに分けたうえで、“ α -change” と見なされる少数のケースを除き、 β 系ほど大きく古註の影響を受けていない α 系の読みを尊重するという原則である。この原則は、写本の二系統性が確認できる範囲、とくにアレクサンドロスの真正の古註が残されている A- Δ 巻で大きな説得力をもつ。しかし近年、『形而上学』の末尾に位置する MN 巻では、そもそも β 系の読みを構成する写本が存在しないことが報告されている (Golitsis 2016)。他の巻と同様、MN 巻でも写本がグループをなして大きく割れている異読箇所が少なくない。だが二系統性の不成立によって、本文を確定するための最大の参照軸が欠落してしまっているのである。

本発表では、MN 巻の特殊な伝承状況を整理したうえで、体系的に解決を導くために、幾つかの具体的な視点を提示する。そのための中核的な作業は、Luna による MN 巻の本文に関する包括的な調査論文 (C. Luna, “Observations sur le texte des livres M-N de la *Métaphysique* d’Aristote,” *Documenti e Studi sulla Tradizione Filosofica Medievale*, 16, 2005, 553-593.) の再検討である。本論文において、Luna は『形而上学』の五つの主要写本 (E, J, A^b, M, C) の読みを再確認し、比較し、MN 巻の範囲の写本系統を復元しようと試みた。既存の校訂版への多くの修正・補足を含んでおり、着眼点と方法論の点でも、少なくとも出版時点では、非常に画期的な成果であった。しかし現在の知見に照らして、批判的に乗り越えるべき点が残されている。第一に、Luna は MN 巻の範囲でも α , β 系という、二つの写本系統が存在することを前提にしており、M 写本と C 写本から「 β 系」を復元することを狙いとしている。先述の通り、この想定は現在では不適切である。第二に、優れた読みと劣った読みを仕分ける基準が曖昧で、一貫性がない。にもかかわらず、仕分けの結果を数値化して比較に用いている。異読のどちらがオリジナルに近い以前に、特定の写本群が示す読みの特徴を集めるべきである。第三に、全体として正確無比な調査であるが、ごくまれに漏れや誤記がある。

写本間の関係性の細部と全体像については、最先端の学者による研究状況の刷新を待たざるを得ない面もある。しかし MN 巻の正文批判の精度を高めるため、現状でも確実に推し進めることが可能で、かつ優先度の高い課題が二つある。一つは二系統性が成立しない場合に拠り所となり、信頼性の揺るがない希少な写本（とくに E 写本と J 写本）の理解を深めることである。この点については、現在リール大学で行っている E 写本の調査の中間報告を行う。もう一つは主要写本の読みが割れるパターンの把握である。Luna が明らかにしたように、MN 巻では JA^b vs EMC の異読が EJA^b vs MC に匹敵して多い。E と J が割れる前者のパターンの分析は、実用上喫緊の課題である。

写本 Trinity College Dublin MS 1337 に於ける
中期アイルランド語版ルーカーヌスのテキストについて

長島真以於

ルーカーヌスのラテン語叙事詩 *Bellum Civile*『内乱』(BC) の中期アイルランド語翻案 *In Cath Catharda*『内乱』(CCath; 12–13 世紀の作) の研究は、これまで、未だ唯一の校訂本 Whitley Stokes (1909) に基づいて行われてきた。しかし、彼が参照出来たのは 4 写本 (H・S・F・C: 下記参照) のみであり、また序文が未完のまま死後に出版されているため、校訂の方針も示されておらず、異読の記述やその選択に関して不可解な箇所が非常に多い。(一例として、拙論 (2019) 「Lucan's Simile in *In Cath Catharda* 567–70 and the Meaning of the Middle Irish Hapax *uchtcrand*」『フィロロギカ』14: 71–79 を参照。)

SIGLA: H = Dublin, Trinity College Dublin, MS 1298 (H 2.7), vol.3 pp.376–417 (CCath 1–740, 1192–2400, 2491–2579) [s. xv]; S = Dublin, Royal Irish Academy MS D IV 2 (1223), ff.2–23va (CCath 1–2805, 3087–3220, 3344–3429) [s. xv]; F = Dublin, University College Dublin MS A 17, ff.1–139 (CCath 1–6167 *fin.*) [1616]; C = Dublin, Royal Irish Academy MS C VI 3 (740) ff.1–26 + 1 (CCath 2635–6167 *fin.*) [1633]

本発表では、Stokes が校合に含めず、発表者が現地で調査した複数の写本のうち、Dublin, Trinity College Dublin MS 1337 (H 3.18), pp.596b–601 [s. xvi] に残る行間註付き抜粋集 (G) が伝える CCath のテキストを取り上げ、F 以外全て断片という状況下での再校訂に向けて、その有用性を検討する。発表者自身による初の翻刻に基づいて、Stokes のアパラトゥス・クリティクスに記載のない多くの異読や、通時的観点からの言語的特徴の分析を行い、G を写本伝承の過程に適切に位置づけることが目的となる。ま

た、その議論を踏まえて、G p.600.22-5 にのみ残り、BC 4.488-91 と対応する次の一文について、その真贋の考察を試みる。

Is éigin dáibsi bás d'fághbail gin coloinn libh; aráí sin ní a ndorchaibh ná a n-aidhchibh nó a mesc bar mbidhbad as coimdigh díbh bás d'fághbail ar ni fes cia dogní maith no saith ann sin.

なお、同写本はデジタル化されており、下記から閲覧可能である。

https://www.isos.dias.ie/TCD/TCD_MS_1337.html

当日は、全ての中期アイルランド語の引用文に試訳を付したハンドアウトを配布する。